

人権なら

2023年3月1日

第147号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

3・11を忘れず、原発ゼロへ

12年目を迎え、後世にツケ回すかの分岐に

まもなく12年目の「3・11」を迎える。忘れることの出来ない東日本大震災。その未曾有の大惨事は2万人超の尊い命を奪った。被災者は一瞬にして、家族も家屋も土地も故郷も失った。今もかつての生活を取り戻せていない。



とくに、福島原発事故は数万人が故郷を奪われ、今もなお避難生活を余儀なくされている。この間、被災者たちは懸命に生きてきた。政府や東京電力を相手に事故の責任と賠償を求めて闘ってきた。

東電との裁判闘争は長々と続く。原発事故で甲状腺がんを罹った人たちも裁判中だ。だが、東電、国・県は関係ないと切り捨て。理不尽きわまる対応で封殺を図る。患者は差別を恐れ、沈黙を強いられている。

原発回帰に舵を切り、再稼働に走る推進派

政府は事故直後、「原子力緊急事態宣言」を出した。今も続いている。なのに、政府や電力会社は事故から何らの教訓を学ぶことなく、原発回帰に舵を切る。人の命よりも自らの利権や権益を考えている。

国内の原発は事故後、すべて停止した。だが、これまでに6原発10基を再稼働させてきた。うち、8基が運転中だ。運転期間を延長させ、40年超の老朽原発まで動かしている。さらに、新增設や建て替えに加え、「次世代革新炉」の開発まで進めるのだという。

誰も責任を負わない。裁判所もお墨付き

政府、東電は放射性物質まみれの汚染水を海洋

放出し、汚染土の再利用までも企む。事故現場では廃炉作業が続く。880トンもの燃料デブリはまだ1グラムも取り出せていない。核のごみ処分場すらもない。原発は人間には制御不可能な代物なのだ。

政府、東電をはじめ、電力会社は事故を忘れ去り、終わったかのように振る舞う。被災者の生活を奪いながら、東電は生き残る。誰も事故の責任を負わない。裁判所もその責任を問わず、被災者の訴えを退ける。原発を動かしてもよい、とのお墨付きを与えている。

政府は被災者に謝罪し、十分な賠償を行え

政府は2年前を最後に追悼式の開催を止めた。原発報道も減った。事故を忘れさせたいのだ。人々は事故の怖さを忘れ、原発への忌避感が薄れている。

電気料金を急騰させ、「需給逼迫」を演出し、原発推進へと誘導する。再稼働すれば、料金は引き下がるとの脅しだ。実際、再稼働賛成が過半数を超えた。「喉元を干支一周で通り過ぎ」(朝日川柳)と言える。

政府は即、原発を止め、「再生可能エネルギー」への転換を図れ。被害者に謝罪し、賠償を実施せよ。

確定申告相談会を実施

経営悪化で困窮する事業者からの相談が大半

2022年分確定申告相談会は2月7日を皮切りに22日まで県内9か所で実施＝写真。大勢の会員が来場し、相談を受けた。中小企業者協会の会員を対象にした相談会も2月24日から始まり、3月8日まで実施する。相談内容は売り上げ減少などによる経営状態に関するものが多くを占める。



おなかもこころもぽっかぽか

1月は「おでんパーティー」でみんなであそぼう会

今年初のみんなかであそぼう会は1月28日に三宅町人権センターで「おでんパーティー」をしました。参加は子ども36人、サポーターの大人9人でした。子どもたちが声かけて参加した子どもがたくさんいました。

あそぼう会は自由な空間です。自由時間は自分で選択します。ものづくりコーナー「やよちゃんをつくったのしもう」は、羊毛フェルトの小物づくりです。いろいろな色のふわふわの羊毛を選び、無心で針でチクチクし、イメージを膨らませている姿は楽しそうでした。



1階の和室ではゲーム機持参の子どもたちが友だちとおしゃべりをはずませながらゲーム。2階の集会室では長机で卓球をしたり、トランプ、風船バレー。近くの公園ではボールあそびする子どもたちがいました。

作り手のぬくもりがいただく人に伝わる

この日のメインはおでんパーティー。10年ほど前、上但馬児童館で学童保育をしていたとき、冬の寒い日におでんをいただいたことが何回かありました。「ただいま～」と帰ってくる子どもたちが、においにつられて調理室をのぞきこみ、「おでんちゃんか」「やったあ！」と喜んでくれたかわいい姿を思い出します。

今は感染症やアレルギーなど、子どもをめぐる環境は変わり、いろんな配慮や予防、注意が必要です。でも、手づくりにはひと手間かけたぬくもりがあります。作り手のぬくもりがいただく方に伝わります。そんなものを友だちと一緒にいただけたらと思い、企画しました。

参加申し込み時に、じゃがいも、大根、たまご、こんにゃく、もちきんちゃく、ごぼ天、あつあげ、ちくわの中から3つのリクエストを聞いて、おでん券を作りました。参加した時にその券を渡して、おでんと交換します。中高生には、受け渡しをお手伝いしてもらいました。

なら人権情報センター職員で地域の人でもある方々にも協力していただき、大きなお鍋で炊いてもらいました。「じゃがいもあじがしゅんでる」「おいしかった」「もっとたべたかった」とほおぼる子どもたち。ワイワイ言いながら、あっという間に時間が過ぎました。

地域の大人が子どもの居場所づくりに関わる

今回、感じたことは、おでんを作ってくくださった方々の段取りの良さ、手際の良さです。買物から前日の準備まであっという間でびっくりしました。「慣れているから大丈夫」の一言でした。感謝と同時に子どもの居場所づくり活動の力になってもらいたい、と思いました。

また、ものづくりの伝授、おでんの食材の提供や調理、子どもたちのあそびのサポート…。いろんな形で地域の人に関わってもらえたことがうれしかったです。

つながりを大切にしてきた地域の人たちに活躍してもらえる活動をつくり、その場所に子どもたちが居るといいなあと思います。大人からも子どもからも元気をもらえる、そんな居場所づくりに思いを馳せています。

(子どもの居場所づくりをつくろう会・山本薫)

金洪仙さんが生き方を語る

ひまわりを支える会が学習会

ひまわりを支える会が2月23日、あざさ苑で学習会。金洪仙さんが「キム・ホンソンという生き方—在日コリアンとして、障がい者として—」と題して講演した=写真。



洪仙さんは1951年に広島で生まれ、大阪で育った。12歳の夏休みのとき、兄のプラスチック工場で仕事を手伝っていて、両手を機械に巻き込まれ、手首を切断する事故に遭った。事故後、自分を否定していたが、受け入れてくれる多くの友人に支えられ、「この条件で生きていく」と思うようになった。

その後、事務員、民族指導員、結婚、子育て、大学非常勤講師と歩んできた。「互いに相手を受け入れる社会だったら、みんな明るく楽しく生きられる」と語った。

未来に継承することが大切

天理大学でハンセン病問題交流・講演会

第2回「ハンセン病問題—真の人間回復をめざして！ 架け橋交流・講演会」が2月23日、天理大学であった。「架け橋 長島・奈良を結ぶ会」と「天理大学成人会」が主催。150人が参加した。



結ぶ会会長の稲葉耕一さんがあいさつ。国の完全隔離政策が90年にわたり、ハンセン病患者、回復者やその家族を苦しめた。1996年の「らい予防法」廃止で法的には隔離はなくなったが、「人生被害」を作り出した国の怠慢と差別政策は弾劾しなければならない。成人会は結ぶ会の発足以前から回復者との交流を行ってきた。若い学生のみなさんのさらなる活動拡大を願っている、と語った。

中尾伸治さんが講演「ふるさとは遠きにありて」

第70代成人会会長の田垣広太郎さんが特別報告。「回復者のみなさんとの交流は60年前から。コロナ禍で交流会ができなかったが、本日、できた。回復者・家族の声や、展示会を通して歴史を知ってほしい」と述べた。



記念講演は長島愛生園自治会長の中尾伸治さんが「ふるさとは遠きにありて」と題して話をした＝写真。中尾さんは奈良県出身。14歳のとき、長島愛生園に入所した。「数年たった頃、兄から子どもが大きくなるまで家に帰らないでくれと言われた。罪を犯しても刑を終えれば家に帰れる。ハンセン病患者は一生家に帰れない」「治る病気とされてから70年経った今でも、差別、偏見は続いている。過ちを繰り返さないためには、記録を未来に継承することが大切だ」と訴えた。

午後は分散会①回復者の方との交流②青い鳥楽団を語り継ぐ③当事者家族の方との交流、があった。

映画「NAGASHIMA」を鑑賞

ハンセン病元患者たちの体験「かくりの証言」

架け橋 長島・奈良を結ぶ会は1月28日、橿原市で学習会を開き、映画「NAGASHIMA」を鑑賞した。

岡山県瀬戸市内の長島には、長島愛生園と邑久光明園の2つの国立ハンセン病療養所がある。入所者は180人余。平均年齢は88歳。映画は、その入所者ら約30人の証言を、2014年以降、8年間掛けて記録し、隔離の歴史を掘り起こしたドキュメンタリーだ。

監督はハンセン病隔離報道の第一人者、宮崎賢。自らがインタビューし、元患者たちが封印してきた「強制隔離」の体験を語る。「家族、親戚に迷惑がかかるから」と誰にも話さなかった元患者たちが、40年間通い続けた監督にだからこそ語った。「もう時間がありません。何があったか知って欲しい」と。



患者を島に閉じ込め強制隔離し人権を蹂躪

元患者たちは強制労働や不妊手術を強制された。1941年から1945年までの戦時下では、重労働と栄養失調で1077人が亡くなった。遺体解剖が行われ、入所者たちは「日本のアウシュビッツ」だったと言う。

人権侵害、憲法違反の「らい予防法」は患者を島に閉じ込めた。日本社会は国の「強制隔離政策」を容認し、市民も加担した。戦後まもなく、特効薬「プロミン」が登場し、ハンセン病は治る時代を迎えた。療養所内には、絵画、音楽、陶芸、短文芸などが興り、入所者の「生きがい」となり、明日へのエネルギーとなった。

元患者らは「らい予防法」は憲法違反として1999年、国を提訴。熊本地裁は2001年、違憲と断罪。国は控訴を断念。元患者らに謝罪した。時代は移り、80代の元患者夫婦が故郷の小学校に招かれ、児童と一緒に給食を食べ、歌で歓迎される。「うれしい」「もう思い残すことはない」と涙するシーンには心が震えた。

原告が「元の場所に返還を」と

琉球遺骨訴訟控訴審第3回口頭弁論で陳述

琉球遺骨返還請求訴訟の控訴審第3回口頭弁論が2月9日、大阪高裁であった。傍聴席91人は抽選で埋まった。

裁判は、京都帝国大学の人類学者が沖縄・



今帰仁村にある「百按司(むむじやな)墓」から盗んだ遺骨を今も占有する京大に返還を求めたもの。

この日、原告の玉城毅さんが意見陳述。定岡由紀子弁護士が「第3準備書面」の要旨を述べた。玉城さんは「先祖が保管庫に閉じ込められ、研究材料にされるのは耐えられない屈辱だ。元の場所に返還を」と。

弁護士が「国際社会に恥ずかしくない判断を」と

定岡弁護士は①先住民族の遺骨返還請求権の具体的権利性②自由権規約委員会による勧告の繰り返し、について述べ、「国は琉球民族の自己決定権を保障し、その侵害を救済する義務を負っている。裁判所は国家機関の一部として国際社会に恥ずかしくない

編集後記 ★★★★★★★★★★

性的少数者や同性婚に対して「見るのも嫌。隣に住んでいるのも嫌」などと差別暴言した秘書官。首相は「言語道断」として更迭。深層を探らぬまま幕引きを図った。自身も「社会が変わってしまう」と背を向ける。自民党には差別言辞を吐きまくる議員が大量に所属。選択制夫婦別姓や入管法、外国人参政権、死刑制度でも非人道的・反人権で動く。国連人権委員会からの勧告も無視。「慎重に対処」と逃げ、国際潮流に逆行し続ける。統一教会や日本会議の極右勢力と同一価値観を堅持。伝統的家族観に固執し、差別温存を図る。人権感覚は微塵も無い。これぞ「言語道断」。

判断を」と陳述した。

保存状況の確認に向けて3者で進行協議

このあと、大島眞一裁判長が京大側弁護人に「京大博物館に行き、遺骨の保管状況を確認したい」と提案。京大側はこれを拒否。裁判長は「博物館のホームページを拝見すると、260万点も保管している。どうやって保管しているのか」と繰り返し検討を促した。京大側は「持ち帰って検討する」と態度を変えた。

裁判長は「進行協議を持ちましょうか」と提案。2月21日に実施することとなった。次回期日も協議する。

終了後、報告集会があった＝写真。



■ 裁判を通して確認し合うべきことは何か

第3回口頭弁論を前に支援集会があった。2月3日には大阪で、8日には京都で、それぞれ開かれた。大阪の集会では、崎浜盛喜・奈良-沖縄連帯委員会代表が講演。「沖縄自立解放運動」について語った。

崎浜さんは、この裁判は遺骨返還だけの問題ではない。裁判を通して確認し合うべきことは何かと提起。

沖縄の歴史を振り返り、琉球併合、沖縄戦を経て、戦後は天皇メッセージもあって、米軍事支配が続く。欺瞞と謀略の72年「沖縄返還」も日本政府の差別と軍事植民地主義による支配そのものだ。沖縄の民衆はこれに抗い続けてきた。今、島々へのミサイル配備や米軍基地による水・土壌汚染もある。沖縄アイデンティティと自己決定権の確立こそが重要、と強調した。

<お詫びと訂正>

前号2面の記事の中で三宅さんの名前は三宅美千子さんの間違いでした。お詫びして訂正します。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/